

大学生の2拍名詞のアクセント

—近畿中央部の京阪式と、中部地方・中国地方の東京式の内省報告—

I T生、OM生、S N生、T N生、T S生、Y M生

要旨 近畿中央部の京阪式アクセントを母方言として持つ3名と、中部地方・中国地方の東京式アクセントを母方言として持つ3名の、大学生の内省に基づく、2拍体言のアクセント報告である。

近畿中央部の京阪式アクセントについては、従来の報告のようにL0型(○「○。○○「ガ。)→○「○。○「○'ガへの変化が著しい。しかしながら、旧来のL0型が消滅している話者はなく、語によってはこの型が残存している。その条件は、相互に独立する、以下の3点があげられる。(1)もともとL0の疑問詞、(2)第2拍が特殊拍、(3)共通語では0で対応する。但し、(3)は例外もかなりある。3条件のうち、(1)[中井1990など]、(2)[橋尾1991]はすでに報告があるが、(3)については従来の指摘はないようである。

東京式アクセントについては、従来の報告より一層共通語に近づいている。あえて特徴をあげれば、東京式の中で、地理的に京阪式に比較的近い方言では1型「○'○ガが多少多い、ある話者は特殊拍に核を置く語がいくらかある、といった点があげられる。また、各自が共通語だと思っていたアクセントとアクセント辞典記載のアクセントが異なるものがいくらかある。もともとの方言アクセントの影響が大きいだろうが、アクセント辞典記載のアクセントが生え抜き・上の世代のものに偏っていることも原因だと考えられる。